

子ども英語から保育英語へ

～「保育英語検定」導入の背景と今後の保育者養成～

鈴木 克 義

はじめに：「英語で保育」の幼稚園、プリスクールが増えている

プリスクールとは未就学児が1日に数時間、週1日～5日程度、英語の環境で保育・教育をうける施設全般のことを指すが、(株)アルクの英語情報ムック『子ども英語カタログ』では、2002年度版より毎年全国のプリスクールの状況を調査している。

常葉短大が英語英文科に「幼児英語コース（のちに子ども英語コースに改称）」を設置した2000年度あたりからプリスクールが全国的に増え始め、2002年度には18校だったものが翌年には43校、2004年度は83校と、倍々ペースで増えている。

その後2007年度に約200校、2009年度に312校、そして2012年11月現在のスペースアルク、キッズ英語のウェブサイトでは全国で348件となっている。ただしこれは基本的にスクールからの申請がベースになっていて、少なくとも静岡県内で私が把握している加藤学園幼稚園、MEKイングリッシュプリスクール、ベイビーパッハ、吉田町のクローバー保育園と山梨県のマリア国際幼稚園、ゆめの木保育園が含まれていないから、354件は確実に超えている。実に10年間で約20倍の急成長市場なのである。

これら英語幼稚園、プリスクールは当然、保育者を目指す学生の就職先としても魅力を増してきて、いち早く保育科と連携して2001年度から卒業生を幼児教育の場に送り込んでいる常葉短大英文科では、前述のマリア国際幼稚園、クローバー保育園を初めとして、十年間で120以上の幼稚園やプリスクールに卒業生を就職させているのである。

ここ何年かは、英語ができる幼稚園教諭の需要が供給に追いつかず、子ども英語コースの幼稚園就職希望者はほぼ100%、早めに就職が内定し、求人待ちが起きている状況である。実習巡回で幼稚園長に話を聞くと、どこの園でも何らかの形で英語活動を実施していて、英語ができる先生はぜひとも欲しいと言っている。

保育科ではこのような状況への対応が遅れ、同じ幼稚園の求人にも保育科と英文科の学生が応募し、英文科の学生が採用されるという事件が起きるに至った。

なぜこのような現象が起きているかということ、以前からのグローバル化の進行に加え、2011年度からの小学校英語必修化、そして同年に起きた東日本大震災と原発事故の影響による企業の海外脱出、そして日本を恐れる外国人英語教師の不足が大きい（鈴木、2011）。

このような「英語ができる保育者」の需要の高まりを受けて、タイミング良く2011年から開始されたのが保育英語検定である。さらに2012年からは(社)国際子育て支援機構と提携して、2級以上の合格者を任意で人材データベースに登録し、全国からの幼稚園長など求人希望者に提供するサービスも始め、すでに名古屋短大など養成校では、保育英検を保育科の学生全員に受けさせるところも出てきている。常葉短大では現在、英文科が中心となって、保育科の学生にも希望者のみ、2級と3級を団体受験させている。

保育英語検定とは何か

保育英検とは「日本の国際的なグローバル化に対応できる幼稚園教諭・保育士の養成の一環として、乳幼児の保育に必要な英語力を身につけることを目的」とするもので、「幼稚園や保育園における子どもたちと保護者の方々と英語によるコミュニケーションを習得する試験」（保育英語検定協会、2012）である。

実用英語検定（いわゆる英検）に代表される従来の英語資格試験は、基本的に英語学習者のための試験だった。ところが保育英検は保育者（とそのタマゴ）の、教える側の英語力を問うという、画期的な試験になっている。これは今まで、中高の英語教員に対しても行われていないし、小学校英語教員の養成を目的とする J-SHINE でも行われていない。

J-SHINE は10万円前後の受講料を払って50時間の講義を受講し、60時間の実習をこなせば誰でも取れてしまう資格で、取得しても英語力を証明するものではないので、検定試験の必要性が言われている。実際、私が担当している J-SHINE 講座の受講生で、保育英検を受検した者もいる。

もう1つ、保育英検の画期的な点は、従来からの「子ども英語」で行われている、「子どもに英語を教える」という発想がないことである。

これは保育英検協会の母体になっているのが東京の西町インターナショナルスクールのようなので、もともと英語の会話ができる子どもを英語で保育し、英語が話せる親や同僚と英語でコミュニケーションが取れる日本人保育者の育成を目指しているからである。

したがって、保育英検のテキストや過去問題を見ても、子ども英語のテキストに見られるようなフォニックスやフラッシュカードなど、英語そのものを教えるツールは一切登場しない。出てくるのは普通の幼稚園や保育園にある遊びや工作道具などのみ。それを使って英語で保育ができるかどうかを見る試験なのである。

したがって、従来の子ども英語に対する「子どもに英語を教えるなんて…」という批判は、保育英語に関しては全く当たらない。英語は教えていないのだから。

子どもは英語が話されている環境で自然に英語を習得し、一歩外に出れば日本語の環境なので、無理なく日本語も習得する。ヨーロッパなどでは普通に見られるバイリンガル環境が、英語で保育することによって実現できるのである。

私の娘は沼津の加藤学園幼稚園で英語イメージ保育を体験し、英語の日と日本語の日が一日交替で来るという環境で育ったが、英語は学ばなくても理解できるようになり、その後も英語力は保持した。もちろん日本語力も人並み以上に身につけ、中学時代を通じて、国語の成績はトップだった。

「英語は聞けばわかるから」ということで、高校二年での留学先は自らチェコ共和国を選んだが、英語の授業で再三、日本の文化についてプレゼンをさせられたそうで、英語力もさらにパワーアップして帰ってきた。もちろんチェコ語の日常会話は3カ月でできるようになり、ついでにフランス語の授業も取って、フランス語の基礎会話もできるようだ。

子どもの頃から外国語に接する環境で子どもを保育すると、日本語を客観的に見られるようになり、日本語はもちろん、複数の外国語にも抵抗がない子どもに育つようである。

子ども英語から保育英語、さらに英語 CLIL へ

日本の「英語を教える」英語教育が、あまり役に立ってこなかったことは明白である。

語学はただ知識を詰め込んでも使いこなせるようにはならず、それを使う必然性と、使う機会を与えなければ、使えるようにはならない。したがって、生活の中で先生も子どもも英語を使う英語保育は、子どもの脳が5歳くらいまでに形作られることを考慮すると、英語を習得する環境としては理想的である。(鈴木、2010)

ただ、今までは英語で保育できる日本人保育者を育てることはあまり考えようとせず、ネイティブに頼ってきたため、英語保育は高額となり、あまり普及しなかった。

しかし最近になって、海外を経験した帰国子女や留学経験者、海外で子育てした経験のある日本人なども増えてきて、少しの研修を施せば英語保育の担当者として十分能力を発揮してもらえる。さらに伝統的に英語が苦手だった保育科の学生も、入学者のレベルが上がって、子どもの頃から英語を習っていた者や、最初から英検2級・準2級を取得している者もいる。そのタイミングで、保育英語検定の登場である。

今までは子ども英語というと、英文科の学生が幼稚園教諭の資格を取って幼稚園に就職する例だけだったが、その幼稚園も最近は幼保一体化を見据えて、とくに公立では保育士の資格を要求するようになり、幼稚園免許しかない学生の就職先は限られてきた。

そこで、最初から幼稚園免許と保育士資格の両方を取れる保育科の学生に保育英検を取らせれば、就職に関しては万全である。しかも2級以上を取得すれば人材データベースに登録できて、全国から求人が来る。給与など条件面でも高いレベルが期待できるだろう。

さらに最近はこの流れを受けて小学校でも、英語そのものを教えるのではなく、英語「で」各教科を教える CLIL という考え方を採り入れるところが出てきた。

CLIL というのは Contents and Language Integrated Learning (内容言語統合学習) の略で、従来の英語イメージが英語の習得を目的に、各教科内容を英語で教えるのに対して、CLIL は必ずしも英語を教えることを目的としない。あくまでも各教科の習得が目的だが、たまたま媒介言語が英語なので、英語も習得できてしまうという位置づけである。

静岡でたまたまこの CLIL を採り入れつつあるのが、わが家の子どもたちが通っている静岡サレジオ中高一貫教育学校である。ここは今年から上智大学との教育提携を実施し、校名の看板にもはっきりと、「上智大学教育提携校」と謳っている。

提携内容は、上智大学への特別推薦枠を30名設けるという大幅なものだが、その実現のために中高のみならず小学校からの提携とし、すでに CLIL の体験授業を実施している。

日本の大学は今、グローバルな競争力の向上と就職力アップのために、英語で授業を行うところが増えているが、先日の上智大学のオープンキャンパスでは、アメリカ人の教員が英語で、中国の歴史を講義していたそうだ。また、静岡サレジオ中学校では、上智大学の日本人准教授が派遣されて、英語で社会科の授業を行ったそうである。

つまり、世界で活躍できる人材を育てるために、大学がどんどん小学校からの系列化を進め、英語で各教科の授業を始めている。この流れが就学前教育まで下りてくるのに、それほど時間はかからないだろう。

保育英検各級の内容と受験対策

保育英検は、英語そのものの力を問うというより英語で仕事を教えたり、英語で保護者にお知らせを書いたり…という能力を問うもので、おそらく英語 CLIL の最初の資格試験であり、古くは ESP (English for Specific Purposes, 特定の目的のための英語) の試験である。英語そのものの難度は英検等と比べそれほど高くなく、出題範囲も保育英語とその周辺に限られているので、市販のテキストや過去問題集で準備をしておけば、ハードルは高くない。場合によってはテキストと全く同じ会話が、本番で出題されることもある。

5級はインターネット上のみで三択式試験となっていて、試験時間も短い。

4級はペーパーテストのみで四択式試験。3級からリスニングが入り、問題数では筆記の半分だがリスニングの配点が3倍となっていて、コミュニケーション力重視の傾向が見られる。英検の3級を取得している学生なら、きちんと準備をすれば合格可能である。

2級はかなりレベルが高くなり、保護者への英語文書作成など、実務的な力が問われる。

準1級から2次試験に面接があり、実技の力に加え、園の中心的存在となって、英語で指示を発する力が必要とされる。

1級は英語保育者のための試験というより、管理者の試験という印象で、高度な保育の知識に加え、採用や入試など、園の業務全般を英語でこなす力が要求される。

級	試験構成	各級の目安	
5級	インターネットによる試験	入門レベル	保育英語習得へのきっかけとして、初歩的な単語・フレーズを理解でき、知識を有する。 (語彙力 約200語)
4級	筆記試験 (50分)	初級レベル	数語程度の簡単な定型的フレーズを用いた表現で園児と簡単なコミュニケーションができる。 (語彙力 約500語)
3級	筆記リスニング試験 (70分)	基礎レベル	保育英語の基礎的な文法を理解し、定型的なフレーズを用いた表現で園児とコミュニケーションが取れ、保護者の簡単なトークを聞き取れることができる。(語彙力 約1000語)
2級	筆記リスニング試験 (75分)	補助レベル	保育英語に必要な文法知識を有し、園児及び保護者とのコミュニケーションと簡単な文章作成ができ、英語だけによる保育において、補助的役割を果たすことができる。(語彙力 約2000語)
準1級	1次試験 (80分) 筆記・リスニング試験 ★2次試験 (10分)	実務レベル	保育英語を使った園児と保護者との円滑なコミュニケーションと、園の活動における文章作成を支援なく行え、補助的レベル資格者への指示ができる。(語彙力 約3000語)
1級	1次試験 (80分) 筆記・リスニング試験 ★2次試験 (20分)	専門レベル	保育英語を使って支援なく園の活動を行え、高度なコミュニケーション能力と文章作成力を有し、園の中核的役割を担える。(語彙力 約5000語)

★2次試験は面接試験です

< 3 級の出題例 > (保育英検協会ウェブサイトより)

次の会話について、()に入れるのに最も適切なものを下記の4肢の中から一つを選んでください。

A: Lunch time is over now.

B: It was yummy!

A: Good. You ate it all.

B: Yes, ().

<input type="radio"/> I'm hungry	<input type="radio"/> chew it well
<input type="radio"/> let's eat	<input type="radio"/> I'm full

< 2 級の出題例 >

- A : We are going to make clay pots next week.
So, could you bring a smock for Taro?
- B : Oh, I will have to go and buy one.
- A : Any old apron, an old shirt of Dad's, or a regular smock can be used.
If you have to go and buy one, then please don't worry about it.
We can think of something.
How about this?
Taro can wear some old play clothes and just call them 'art clothes'.
- B : How wonderful for him to be able to do art without worrying about
() his clothes.
What a good idea! Thank you.

<input type="radio"/> ripping	<input type="radio"/> staining
<input type="radio"/> wrinkling	<input type="radio"/> shrinking

3 級では保育者と子どもとの対話、2 級ではそれに加え、保護者との対話を中心になっている。英語のレベルは 3 級と 2 級でかなり隔たりがあるので、いずれ受験者が増えれば準 2 級を導入する必要があるかもしれない。3 級は、保育科の学生でも十分合格できる。

2 級はリスニングが急に難しくなる印象だが、英文科の学生が今まで数名合格している。

保育英検 1 級を受けてみた

2011年の導入時には5級から2級まで年2回だった保育英検だが、2012年からはそれに加え年1回、準1級と1級の受検機会が加わった。

保育科専任の英語教員として保育英語を教えている私としては、腕試しに1級を受けてみることにした。

7月に他の級と同時に行われた1次試験は、受験者が少なかつたらしく静岡会場では行われず、横浜まで行く必要があった。

注文していたテキストが届いたのがぎりぎり前日というタイミングで、内容が保育の発達段階など、かなり高度な内容も含まれていて手応えがあったが、往きのクルマの中で付録のCDを聴きながら行ったのも功を奏し、筆記・リスニングとも何とか答えることができた。しかし筆記の時間が40問で50分と少なく、見直しをする時間が取れなかった。

1次の合格通知は1週間ほどで届いたが、2次は9月の下旬で2カ月も空いていて、やや気が抜ける。ここまで空ける理由があるのだろうか。合格通知はさらに1カ月後だった。

2次の面接は与えられた材料を使って、ネイティブの試験官の前で英語で説明しながら、課題の工作を仕上げるといったものだった。考える時間が5分、制限時間15分である。

私はふだんから授業で似たようなことをやっているのでも、わりあい楽にできて時間も余ったほどだったが、担当者によると他の受験者はほとんどできなかつたらしい。

日本人は決まった答えを暗記するのは得意だが、その場で考えてプレゼンというのは苦手なのかもしれないと、その担当者は述べていた。

蛇足ながら、試験官がどうしてもネイティブである必要があるのかと、疑問に感じた。



保育英検の導入と、今後の保育者養成

実際に自分で受けてみて、保育英検はまだ完成途上にあるものの、非常に将来性のある、英語教育や幼児教育を変革するポテンシャルさえ秘めたものだと感じた。

一つには子どもに英語を教えるのではなく、英語で保育しながら無理なく英語を身につけさせるという点で、CLIL など最新の早期英語習得の理論に合致していること。

さらに2次試験で、答えが決まっていない課題を英語でプレゼンする能力を問うあたりが、新時代の学力観を意識しており、今後の発展を予感させることである。合格者が少ないからといって、すぐにこの試験方法を変更するようなことはしないでほしい。

学力の定義はいろいろあって、OECD が実施する国際的な学力テスト、PISA で学力が落ちたからといって、テキストのページ数を増やし、詰め込み教育を復活させた文科省は大きな勘違いをしている。それよりもこれからの、先が読みにくい時代に必要な学力とは、2012年の常葉学園夏期研修会で1級建築士の鈴木敏恵さんが述べていたように、情報を活用して新しいものを提案する力だと思う。

情報を活用するには、インターネットを流れている情報の多くは英語だし、それを使って英語でプレゼンテーションする能力というのは、これからの学力の基本である。その能力を保育者に問う保育英検は、今後の教育全般を変える可能性さえあると思う。

さて、常葉短大と3年ごとに相互評価を行っている名古屋短大では、保育科の全学生に保育英検を受検させ、さらに希望者にはオーストラリアでの保育実習、ニュージーランドでのインターンシップまで用意している。この点については、前回の相互評価の「国際交流」の項目で、先方から遅れていると指摘された部分なので、ぜひとも対策を取りたい。

まずは2012年度は、教養教育の「英語圏の文化と言葉A」という科目の中で、私が担当している一部のクラスのみ保育英検2級のテキストを購入させ、3級と2級の団体受検を希望者だけ、英文科と合同で行っているのみなので、これを次年度は全クラスに広げ、まずは3級から全員に受検させたい。

2級については保育科の専門科目の中に新たに「保育英語A・B」という科目を設置し、取りあえずは2級、可能なら準1級の取得を目指したい。前述のように2級以上の合格者は人材データベースに登録できるので、保育科の就職先拡大に寄与することができる。

将来的には専攻科の中に「保育英語専攻」を設け、「保育英語研究」「保育英語実習」といった科目を置いて、本格的に「英語で保育」ができる人材を育てたい。

実は現時点でも既存の英語幼稚園・プリスクールに加え、浜松市内に英語100%保育の幼稚園を作ろうという計画が進んでおり、人材供給の依頼を受けているのである。

英語ができれば就職100%は間違いないので、この専攻は人気が出ることだろう。

将来的に短大保育科が四年制になるようなことがあれば、本格的に「保育英語コース」を設けるのもよいだろう。校舎の建替え時に保育所を併設して英語保育を行えば、学生の実習の場にもなるし、子育て中の学生や教員の育児支援にもなる。

大学に残された、数少ない成長分野の一つが「保育英語コース」なのである。

参考文献、ウェブサイト

- アルク (2009) 「子ども英語カタログ2010」
- スペースアルク (2012) 「子ども向け英語スクールサーチ&リスト」
<http://www.alc.co.jp/kid/bilingual/school/preschool.html>
- 鈴木克義 (2011) 「英語幼稚園・英語託児の必要性和将来性」常葉学園短期大学紀要
- 社団法人 保育英語検定協会 (2012) ウェブサイト <http://www.hoikueiken.org>
- 鈴木克義 (2010) 「英語は小学校からでは遅すぎます！」幼年教育出版
- 名古屋短期大学保育科サイト (2012) 「海外実習、海外保育実習」
<http://www.nagoyacollege.ac.jp/edu-hoiku/abroad.html>